
きよしこのよる

葉月ここの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きよしこのよる

【Nコード】

N3234A

【作者名】

葉月このの

【あらすじ】

クリスマススイブに生まれた聖はクリスマスが嫌いだった。その理由は……？

「……はあ。」

街に降り積もる雪を窓越しに見つめ、俺は溜息を吐いた。時は師走。街中がクリスマスムードに染まり、大いに賑わっているのだから、俺の心は重い雲がかかっているようだ。

原因は両親の事だ。いつもクリスマスになると、家を空ける事が多くなる。そして24、25は家に帰ってこない。それは俺が物心付く頃、いや、もっと前から、毎年続いている。仕事で忙しいのは分かる。それ自体は大した事では無い。問題はその日だ。

12月24日は、俺の誕生日だ。

本来ならば家族で盛大にはいかないまでも、両親が祝ってくれるものだ。だが俺は、一度も祝ってもらった事が無い。友人の誕生日会に招かれる度に、羨ましく思っていた。そしてある日、その感情は爆発し、俺は両親に問い質した。何故家では誕生日を祝ってくれないのか、と。両親の言葉は至って単純だった。

『私達は、サンタクロースなんだ』

今考えれば、信じようも無い馬鹿みたいな話だが、当時の俺は純粹で、その言葉をそのまま信じてしまっていた。勿論それを友人に話して馬鹿にされた。サンタはフィンランドから来るものだと言われているのだから、日本にいるわけが無い、それは嘘だと散々に言われた。その日から俺はクリスマスが嫌いになった。嘘を吐く両親と、クリスマスイヴに生まれたが故付けられた、『聖』という自分の名も……。

「……はあ。」

これで何度目の溜息だろうか。眼前の窓硝子は結露と俺の溜息で白く曇っていた。それをぼんやり見つめていると、突然後ろから何かに抱き付かれた。いや、抱き付かれた、というよりは押し掛かられるみたいな感じだ。

「どーしたよ、キヨ。景気の悪そうな顔してさ！」

後ろから聞こえた声に何とか首だけを後ろに向ければ、そこには幼い頃からの親友の顔があった。

「何でもない、つつか離れる。気持ち悪い」

親友をなんとか引き剥がし、俺は窓を背にして親友に向き直った。

「何だよ。何か辛気臭い顔してつから、俺様が元気付けてやることしたのに」

「要らん。余計なお世話だ」

とは言え、さっきまでの重い気持ちが紛れたのは事実だ。少しはコイツに感謝だ。

「で、本当にどうしたよ」

「んー……寒くなってきたと思ってさあ……」

「そりゃ12月だからだろ。……ん？そっぴや、もうすぐクリスマスだよな」

その言葉に、俺の気持ちは再び重くなった。それでもその感情を抑えて、なんとか頷いてみせる。

「お前は今年も彼女とデートだろ？」

「おつよ！俺とあのコの絆は強えーぜ！」

明るく言う男に、俺は羨望の眼差しを向けた。誰かとクリスマスを過ごせる幸せ、俺が今まで体験した事の無い事だ。

「羨ましいと思うなら、お前も彼女作れよ！」

簡単に言ってしまう親友に、俺が何か言おうとした時、親友を呼ぶ教師の声が聞こえ、親友は廊下の奥へ消えていった。

……彼女、ね。そんな簡単に出来るものでもないのだろうか。

俺は再び窓から外を見つめた。

今年で何回目だろう。両親のいない、一人きりのクリスマスは。自分の年齢を考えれば簡単に答えは出るが、数える事すらも億劫でならない。何をする気にもなれず、俺は体をベッドの上に投げ出した。雑誌を見たりテレビを見てたりしたが、眠気はそう簡単に訪れなかった。それでも寝てしまおうとするが、努力に反比例して目は冴えていった。その時だ。

コンコン

誰かが窓を叩く音が聞こえた。一瞬空耳かと思ったが、何度も聞こえるその音は空耳ではなかった。だが俺のいるこの部屋は7階にある。ベランダも無い、足場になるものもない窓を、誰が、どうやって叩くのだろうか。俺は窓を開け、外を覗いた。

そりがあつた。そりが宙に浮いていた。そしてそのそりの後ろの方に白い大きな袋を乗せ、誰かが乗っていた。

「Merry, Christmas!」

そう俺に言つたのは、赤い服に身を包み、白い髭で顔を包まれたそりの上の人物。

「と、父さん!?!」

間違う筈は無い。いくら顔が隠れていても、その声は紛れもない俺の父親の声。

「漸く気付いてくれたな、聖」

父はにっこりと微笑んだ。信じられない。今日の前にいる父の姿はサンタクロースそのものだ。ずっと嘘だと思っていた、あの話は本当だったのだ。

「父さん、どうして……」

「乗るか?」

俺が何かを言う前に、父は俺に言った。俺が恐る恐る頷くと、父

は俺に手を差し伸べた。俺は窓から身を乗り出し、その手を掴んだ。俺の体はふわりと浮かび、すくとんと父の隣に収まった。

父が何かを言うと、そりはゆっくりと動き出した。俺は最初驚き慌てふためいたが、父は優しく大丈夫だ、と言いつけた。

「どうして、そりが空を飛んでるんだ？」

少し落ち着いた俺は、父に尋ねた。父は

「クリスマスの奇跡」

と言ったが、恐らく父自身も知らないのだろう。

その他にも父は色々教えてくれた。トナカイは維持費がかかるから使っていない、とか、プレゼントが自然に袋から出て子供の靴下に入る事とか、毎年プレゼントを運ぶ地区が違う事とか、今年は母は違う地区だったために俺に会えなくて寂しかったとか。「聖、下を見てみる」

俺は言われるまま下を見た。俺は感嘆の声を漏らした。下に広がっていたのは、街のイルミネーションが広がる幻想的な光景だった。

「父さん」

俺の声に、父は俺を向いた。俺も父の顔を見た。

「俺も、サンタクロースやりたい」

俺の唐突過ぎる言葉に、父は目を丸くしていたが、すぐにいつもの優しい顔になった。

この日俺は、クリスマスと両親と、『聖』という俺の名前を好きになった。

end .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3234a/>

きよしこのよる

2010年10月8日15時30分発行